

つなプロ 「教育支援人材、ってなに？」ワークショップに参加して

N類総合社会システム専攻 2年 石井道子

今回のワークショップに参加する前は、教育支援人材というと学校教育に限定して考えており、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなど学校にいる人を思い浮かべながら、考えを進めていた。しかし、このワークショップの最初の班で、「教育」をどの範囲でとらえるのか、という問いを投げられた時に、今まで自分が「教育＝学校」と思いこんでいたことに気付くことが出来た。確かに、子どもの学びの場は学校だけに限らず、様々なところにある。用務員の方や登下校時に横断歩道で黄色い旗を持って立ってくださる方を考えてみると、特別な資格は持っていない。しかし、この人たちも教育支援人材であり、誰でも教育支援人材になり得るのではないかとすることに気が付いた。そのため、教育をどの範囲にとらえるのか、教育支援人材を養成するにあたって何らかの専門性をつけることができるということが大事なのではないかと思った。また、そこからは東京学芸大学が教育支援人材養成によって、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなどを養成すると仮定して話を進めた。教員養成では、一通りのことが自分ひとりでできることが求められており、周囲に対してヘルプコールを出すことが難しくなっている。その雰囲気を出しなれば教育支援人材を養成しても上手く連携が出来ないのではないだろうか。教育支援人材をつくるということは、これからますます学校での連携を図ることが前提にあるということになる。教員養成も教員がすべてを抱え込むような教育を脱しなればならないと思った。また、教育支援人材養成においても学校の文化を理解する必要があると思う。「学校」という職場は、一般的な会社などに比べるととても閉じられた環境にあるように思える。そこで、連携をするための基盤として、お互いがどのような仕事をしているかということやどのような価値倫理をもっているかということ学ぶ必要があると思った。そのような点でいうと、学芸大学は小学校中学校のすべての教科の教員だけでなく、養護教諭、ソーシャルワーカーなどを養成しており、相互に理解するという目標を達成するにはとても良い環境にある。この強みを生かすためにも、環境整備は大事だと思った。

今回のワークショップを通して、今まで自分の考えていた「教育支援人材」に自分の思い込みが入っていたことや教育支援人材養成のためにはどのようなことが必要なのかということから、「教育支援人材養成課程」ということの問題だけではないことが少しだけ分かった。

この部分を通して、さらに教育支援人材が何かということについて理解したいと思う。

「教育支援人材」が専門性を持つことの意義

N 類総合社会システム専攻 2 年 安部敏基

平成 26 年 7 月 12 日に行われたスペシャル・ワーク・ショップのテーマは「教育支援人材、って何？」であった。これは、東京学芸大学の教養系が一つに統合され、「教育支援課程・教育支援専攻」となることを受けて、「教育支援人材」を定義する糸口を得るために行われたものである。

そもそも「教育支援人材」とはどのようなものか、といったことから議論は進んだ。私は「教育支援人材」を、「子どもの生活すべてに関わる人材」と考えた。子どもに限った話ではないのだが、特に幼少期や青年期は、他者や周囲の環境に大きな影響を受け、それが自己の確立に関わってくることになる。その人生においても重要な時期に子どもとかわりを持つ人々は広い意味で「教育支援人材」とも呼べるかもしれない。ゲストで来ていただいたスクールソーシャルワーカーの黒川さんや宮下さんは、「子どもに関わる大人の行動はすべて子どもの教育に還元される。」という旨のことをおっしゃっていた。要するに、子どもと関わる大人は皆「教育支援人材」ということになる。

しかし、上記のような「教育支援人材」は、本学が目指す「教育支援人材」なのであるか。これまで述べた「教育支援人材」には、事務職員や用務員、調理員や警備員などの「教育」・「支援」の専門性を持たない人々も多く含まれている。それでは本学で「教育支援」を専攻する学生に専門性を持たせる意義が曖昧ではなかろうか。そこで、社会一般における「教育支援」と本学における「教育支援」を区別する必要があるという議論に至った。

ここからは完全に私の考えなのだが、社会一般における「教育支援人材」とは、「学び」というよりは「育ち」に重きを置いているように思われる。教師などの職種よりも、子どもたちにとってより緩やかなセーフティネットのような印象を受ける。それに対し本学における「教育支援人材」とは、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなどの専門性を持つことによって、「支援」を通して様々な問題の解決、「教育」に対しての教職とは異なったアプローチができる人材、といった印象だ。その専門性をもってスムーズな支援、周囲への働きかけ、教育者または支援者への支援を行ってゆくことが求められていることではないだろうか。

今回のスペシャル・ワーク・ショップを通して、本学と社会一般での「教育支援人材」の差異、専門性を擁する意義について、今後も継続して議論を重ねてゆかなければならないと改めて強く感じた。また、「教育支援人材」を定義するに留まらず、それを社会に発信し、それらを学ぶ人々の増加と、職につけるような環境、地位の確保や向上につながってゆくことを期待する。

つながるプロジェクト 教育支援人材とは何か

N類総合社会システム専攻 2年 森高沙樹

今まで、理論班として進めてきた議論は、教育支援人材という語句を中心に話が進んでいたように思った。それが、今回実際現場で働いている方々の話を聞くことができ、教育支援とは何か、という根本的な視点に立ち返れたように思った。今回私の中で鍵となったのは、教員側と他の専門職側の視点の違いだった。教員は、目の前の、教室の中の子どもにかかわっていくのが精いっぱい、かかわり方を間違えればすぐに子ども態度に反映される。そんな即自分の教育が評価されるような立場に置かれていて、教室の外にまで意識が及ばないこと。けれど、専門職側としては当たり前のことが当たり前でできない子どもの存在を教師に認めてもらい、「支援」するべきだと考えていること。

また、教員は自分の考える教育を手伝ってくれる人を求めているのに、現状では違う視点からの解決法を提示されてしまうこと。また子どもの「そのまま」を受け入れるという考え方に違和感があること。理論班の議論では、総合社会システムの社会福祉士を目指している学生が多く、教員の視点が不足していたと感じた。また、教員の専門職に対する認識の違いは、現場ではなく教育の段階から修正していくべきだと思う。それにはやはり、教員になろうとしている人々と、教育支援人材になろうとしている人々とがグループワークできるような環境が必要なのではないか。

また、自分の中に、教育支援人材の基準として「すくいあげる」イメージがあったことを発見した。学校の教育は、教育費が出せるくらいのお金があって、家族関係が良好で、何の支障もなく日常生活が営める「普通の」子どもにとっては、元来持っている能力を伸ばすことができると考えられる。だが学校に来ること自体が困難で、勉強に集中できるような状況にない子どもにとっては、基礎をやらずに応用を教えられるようなものであり、その基礎を整える必要がある。そして教師の手が回らない基礎を整える支援をするのが教育支援人材なのではないだろうか、と考えたが、それでは意味が狭くなってしまっても感じた。

しかし、その側面があることは確かだと思う。学校での学力保障については、加瀬先生、竹村さんの班と、宮下さん、黒川さんの班で異なる意見がでたが、双方に共通していたのは、「勉強する、ということが選べない状況」にある子どもが存在し、その子どもへの支援はされるべきだ、というものだった。勉強することが選べないと、進学も難しく、貧困の連鎖につながる恐れがある。幼少時のサポートにより、その子どもの人生にまでも影響してしまうのではないかと思った。

今回のディスカッションでは、自分の中での色々な気づきがあり、大変興味深いものになった。また、今後教育支援人材を考えていく上で重要ないくつかのきっかけが発見されたように思う。

つなプロ 教育支援人材って何？ワークショップ

N 類総合社会システム専攻 2年 木尾夏実

1. 振り返り

一言に「教育支援人材」といっても、その言葉は使われる場面でその言葉の意味は変わってくる。たとえば、教育を支援する人材、という捉え方をすれば、生活の場での教育や、学校での教育、など幅広い場面で活躍する、人材を指す。対して、教育支援人材を養成する、という使い方をすれば、その時、教育支援人材は何かしらの専門性を持った人材になる。

教育支援人材と一口に言っても、多様な職種が考えられる。話し合いの際、たびたび話題となった、用務員のおじさんやシルバー人材なども含めるとその職種は本当に数えきれないほどだ。そんな中で、やはり現在、教育支援人材の中心となっているのが、教師という職業である。

現在、日本の教師は相談を出来ないという問題があるが、それを解決するべく広がるのが教育支援人材という新たな枠組みであるが、まだ教師と他職の間に埋められない溝があるのが現実である。と、いうのも教師という仕事は登校するのが当たり前、そこからが仕事なのに対し、福祉の仕事では生きていくだけで満点、学校に行けたらそれは大いなる加点になるのだ。根本的な考え方が違うことで衝突することも多いが、子どものより良い環境づくりのために連携することが必要である。

2. 学んだこと

本当に、勉強になりました。ゼミの中で話していたときから加瀬先生はもちろん先輩方のお話になるほど、と思うことが多々あったのですが、今回のワークショップは格別でした。特に、福祉は加点方式、学校は減点方式、という言葉が心に響きました。学校教育と福祉は合い入れない、ということはなんとなく思っていました。しかし、それがなぜなのかは全く分からなかったのです。それを今回この言葉がきれいに解決してくれたように思ったのです。どちらが良いわけでも、どちらが悪いわけでもないとよくわかります。福祉も学校教育も自分の理念を誇りに思うからこそどうしてもこだわって衝突してしまう。どちらも子どものことを一番に考えているのに、角度が違うからこそ交わることが出来ないということがよくわかり、なんだか悔しい気分になりました。

しかし、交わることが出来ないからこそ、子どものことを別の角度から支えることが出来るのではないかと、とも思いました。これから先、お互いにお互いを認め合い、よりよい教育環境を築いていくために必要なのが、“教育支援人材”なのだと強く思いました。もし、その先駆けに東京学芸大学がなれたなら、私は教育学芸大学の卒業生ですと、今以上に胸を張って言えるので嬉しいです。

教育支援人材って、なに？～ワークショップに参加して学んだこと～

N 類総合社会システム専攻 3年 高橋麻友子

7月12日に開かれたワークショップは、現場のスペシャリストである竹村さん、黒川さん、宮下さんの3名をゲストとして行われた。

これまでのつなプロで、教育支援人材とは何かについて議論を続けてきた。こども支援人材と教育支援人材の境界線はどこなのか、そもそも教育とは何であるのか、教育支援人材の目的とは何か、などについて議論してきたが、私たちだけでは煮詰まってしまう。しかし、今回のワークショップを通して、自分の中でもややもやしていたものが少しだけ整理されたと感じている。

最初に、黒川さんにそもそもこども支援人材＝教育支援人材なのではないかと言われ、私が今まで持っていた固定概念を覆された。確かに、これまでの議論でもこども支援人材と教育支援人材の間には明確な境界線がないことや、教師や用務員、警備員といった職業で分類することができないという話は出ていた。あえて、教育にスポットをあてると、教育支援人材といえるのではないかと思った。定義として教育支援人材について説明するならば「何らかの専門性をもち、こどもの教育に関わる人」が教育支援人材なのかもしれないと私個人として感じました。

また、実際の現場の話聞き、仕事の約8割が教師の「メンタルヘルスケア」あると聞いていたことにも驚いた。私たちは、大学内で私たちなりに考え、議論しているだけで、実際の現場のことは何も知らないのだということを感じた。教育系のつなプロメンバーと話していて思ったのは、せつかく教師を目指す人とそれを支援する側を目指す人が一緒に学べる環境にあるのだから、もっと視野の広い勉強がしたいと思った。

黒川さんも強く主張していたように、私たちが学生のうちに、実際の現場に行き、現状を知る必要があるのではないのでしょうか。

教師とソーシャルワーカーは、根本的な考え方は違うので、その中でこどもに最大限の利益をもたらすような教育や支援を行っていくためには、「相互理解」が必要不可欠であると思う。

竹村さんが言っていたのは、支援人材を養成しても、仕事に見合う報酬が得られないために、実際に現場に来る人がとても少ないということでした。福祉がこんなにも必要とされているのに、なぜその仕事だけで食べていくことができないのか、疑問に思いました。こうした現状を変えていくためにも、教育支援人材の重要性を多くの人が理解し、歩みよるべきだと思います。

今回のワークショップで、3名のゲストの方々が新しい風を吹き込んでくれ、とてもよい経験になりました。

つなプロ「教育支援人材ってなに？」から学んだこと

N 類生涯学習専攻 4年 木村奈津子

○言葉を定義するということ

言葉を定義することは難しい。なぜなら、言葉を発した人の立場によって受け手のイメージするものが異なるという問題が起こるからだ。例えば、教員養成大学である東京学芸大学が「教育支援人材」という言葉を使う場合、そこには「学校教育においての人材」という意味が含まれざるを得ないだろう。しかし、教育とは学校だけで行われるものかという、そこには疑問符が付く。教育は、家庭でも習い事でも行われることであり、学校教育に限定して「教育支援人材」を定義することは一般にはふさわしくない。ならば、どこまでの大人、機関が教育支援人材となるのか。今回のワークショップは、それについて議論を繰り返した。言い切っているものなのか、これは主観的すぎる捉え方なのではないか、常にそのような思いを抱きながら考え、発言し、相互に議論を深めることはとても楽しかった。さらに、現場で働いていらっしゃる方の意見が加わることで、議論が深まり、机上の空論ではなく現実味を帯びた言葉として想像しやすくなることにも感動した。

私の中で「教育支援人材」という言葉の定義は、まだまだ曖昧である。しかし、本ワークショップを経て、その定義が少し見えてきたような気がしている。本レポートは、このワークショップから学んだことや考えたことをまとめ、さらに「教育支援人材」についての考察を深めていくために活用したいと考えている。

○教育支援人材とは

教育支援人材を定義する場合、教育支援、教育支援人材、教育支援人材養成の三つに区分して説明する必要がある。教育支援と言うのは理念的なものであり、その理念の到達を目指して実際に職業として活躍する人を教育支援人材とし、その職に就くことを目的に、人材を養成することが教育支援人材養成になる。東京学芸大学は三番目の教育支援人材養成を担う機関であることは言うまでもないが、そうなるためにはやはり理念の部分から「教育支援」を考えていくことが必要だと感じた。

○学芸大学の役割・立場

現場で働いていらっしゃる 3 名の方が、口をそろえて「相互理解の欠如」によってトラブルが発生するとおっしゃっていた。私はこの言葉から、東京学芸大学の役割の一つとして、将来的に「教育支援人材」となるべく学生同士が互いの専門性を学ぶ中で、自己の価値観や理念について意見を交わし合う場を創出し、互いに学びあう機会を作ることが必要だと感じた。教育系、教養系が混ざり合い、「学芸大生」としてどのように子どもと関わり、どういった教育支援をしていくことが可能なのか、必要なのか、相互に学びあうことを通して、将来的なつながりを創出することができるのであないだろうか。教育支援人材とい

う職業につくかどうかは別として、まず、「東京学芸大学の学生」として、子どもについて、教育について考える場が存在するということが、教員養成大学としての東京学芸大学の役割であると感じた。

○メモ（気付いたこと・学んだこと）

- ・教育支援＝学校復帰？生活保障？学力保障？
- ・教育と福祉の相互理解の欠如 専門性と限界性
- ・教育を望まない、望めない子や、親の存在

教育支援人材と学校におけるよりよい多職種連携

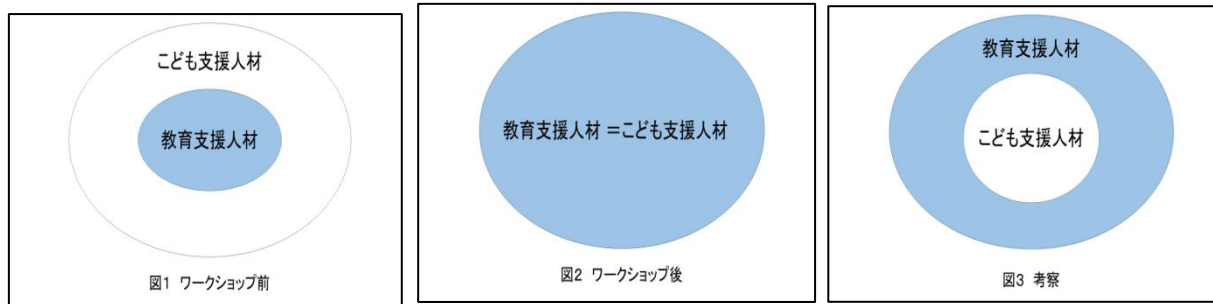
A 類社会科教育専攻 4年 川原 爽

今回のワークショップではゲストを3名お招きし、ここ数回の定例会で話し合ってきた「教育支援人材とは何か？」というテーマで話し合いを行った。

子ども支援人材と教育支援人材について、私たちは図1のようにこどもに関わるすべての人の中に包括されるものであり、何か両者には違いがあるのではないかという議論を行っていた。しかし、ワークショップ後はその考えは大きく変わった。図2で示すようにこども支援人材と教育支援人材は同じではないかということになった。この変化は教育とは何かを見直すことで生じた。教育はこどもを取り巻く様々な人との関わりの中で行われる。また、教育はライフステージにおいてどの段階でも行われるため、各段階で教育支援が必要だという話もでた。以上のことを踏まえると、図3のようにこども支援教育支援人材とは教育支援人材の中に含まれるのではないかと考察することができる。今回のワークショップをまとめると、人生の中で、様々な人との関わりの中で行われる教育を支援する人材が教育支援人材であると言えるのではないだろうか。

また、今回のワークショップでは、教員を目指すうえで新たな視点を得ることができた。私は今まで自然と「こども＝児童生徒」として学齢期のこどものことを捉えていた。この考え方は、教員養成系として4年間学んできたから生じるものである。私だけではなく、この考え方は多くの教員養成系の学生は無意識のうちにもっているのではないだろうか。しかし、この考え方こそ、学校現場でスクールソーシャルワーカー(以下、SSW)と教員の関わりの中で、戸惑いと混乱を招く根源となっているのではないだろうか。教員とSSWは共に、教育支援人材として専門性をもち、それぞれ異なるこども観をもっている。各々のこども観にどちらが正しい、誤り、良い、悪いということはない。

よりよい教育支援人材を目指す私たちは専門性を身に付けなければならない。それだけでなく、他の職種の教育支援人材のもつ子ども観が異なることに気づくことが重要である。私たち教員を目指す学生は、私がそうであったように、この気づきに欠けているのではないだろうか。この気づきの機会をもつことこそが、教育支援人材同士を理解し認めこどものよりよい教育のために、パートナーとして多職種連携を可能にするのではないかと今回のワークショップを通して感じた。



つなプロスペシャルワークショップレポート

C 類特別支援教育専攻 4年 久保田裕斗

今回のワークショップを進める中で私がずっと考えていたことは、教育／福祉の線引きや接続、またその関係性についてである。

その問いは、「指導者と支援者の違い」という竹村さんのお話から始まった。そのお話を聞いて、指導者 (=先生) は教育の視点をもっており、支援者は福祉の視点を持っている、ということだと私は考えた。指導者の視点は学校の日常 (8:00～16:00) に向けられているが、支援者の視点はそれ以外の時間を射程に入れていることなどが、その例として挙げられるだろう。「子ども支援」において、そのような「教育の枠組み」から少しずらした視点を持つこと、その枠組みにとらわれないことの大切さを、竹村さんは語った。つまり、このワークショップの重要な論点である、教育の分野にいる人たちが福祉分野の人たちと「つながる」重要性を、竹村さんは問題提起してくれた。

そのお話を聞いたあと私は、その指導／支援の線引きや関係、つまり教育／福祉の線引きや関係に考えをめぐらすこととなった。私は教員免許を取得する学科に所属しており、福祉か教育かと問われればとりあえず教育分野の人間ということになるであろう。しかし、よく考えると教育／福祉の線引きはとても難しい。この教育／福祉の言いかえとしては、指導／支援、児童生徒／子ども、学習／生活、などが挙げられた。

教育／福祉とは何かを考えるために、学習／生活という切り口から考えてみる。学習は、たとえば「跳び箱を飛べるようになること」「友達との上手な関わり方を知ること」など、

観察可能、評価可能であることが多い。「学校で得られるものは何か？」という話題がワークショップ中にもあったが、そこでは学力、社会性、友達、部活、そして学習の身体などが例として挙げられた。それはつまり、文化資本や社会関係資本であり、基本的に“役に立つこと”である。現在の学習は多くが未だ機能（＝目的への貢献度）的なものであるとすることができるだろう。一方で生活は、そのような“役に立つか立たないか”、つまり機能的なものをその本質にはしていない。「学習」は学校文化の中にあるものであり、その価値観も比較的確立されているので、その価値観に沿った目的がありそれに対する貢献度もはかることができる。しかし、「生活」とはつまり生きることであり、何らかの目的は予め決まっておらず、その意味で機能的であるとは言い切れない。機能的なものが入る余地はあれど（学習は生活の中に組み込まれている）、そこには「ただ、生きている」という存在的な位相が確実に存在している。もしくは、その存在的な位相が生活の、生の基盤であると言える。

最初の竹村さんの話に戻れば、「発達」を標榜し「主体」を形成しようとする、機能的な「古い教育の枠組み」とらわれず、存在的な生の基盤（＝福祉）を前提としその上で今の社会の枠組みに沿った機能的なものの獲得を目指すことが、教育には必要なであろう。そのような考え方が、不登校の子に代表されるような「教育の枠組み」になじまない子どもと関わるうえで重要であるし、教育支援人材や子ども支援人材を考える上でも重要であろう。

「教育支援」に関わる事柄を考える際の枠組み

東京学芸大学 大学院 修士課程 2年 特別支援教育専攻 佐藤美友貴

7月12日(土)、スクールソーシャルワーカーとして活動されている竹村さん、宮下さん、黒川さんをお迎えし、ワークショップが行われた。これまで自主ゼミの学生で考えてきた「教育支援人材」と「子ども支援人材」のイメージに関するプレゼンテーションの後に、「教育支援人材とは何か？」について、ワールドカフェ形式で深めていった。

私が最初に属したグループでは、「教育/児童生徒/指導」と「学び/子ども/支援」という言葉に表れるような教育と福祉の視点の違いに焦点をあてて、議論が進められた。双方の意識や手法の違いが、一人の子どもをめぐる際に対立する場合がある。例えば不登校の子どもを目の前にした際、教師は学校に来られるような指導をするかもしれないが、ワーカーとしては、「教育の枠組みからはずす、という選択も重要で、それが教育になり得る場合もある」との話になった。時には、寄り添い、子どもを待つことを手法として用いる福祉に対し、学校内では集団を相手にしているなどの要因も相まって、教師は目の前の児童の行動を好ましい行動に教育しなければ、と対応しがちである。これらの状況を、一方が悪いという議論にしてしまうことなく、双方の質を高めることと並行して、選択肢を増やして

いく必要がある。つまり、多様な居場所が用意される以前に、学校の条件の改善も進められるべきであるということだ。以上の議論から、教育支援人材は2つの軸で考えていく必要があるのではないかと整理された。義務教育として大多数の子どもが在籍することになっている学校の状況改善含めたサポートのための人材と、選択肢の一つとしての学校以外で子どもを受け止める人材の2軸である。

2つ目のグループでも、やはり「教育」と「支援」という言葉のとらえ方が話題になった。「教育支援」という言葉を聞くと、子どもに関わる人みんなという大きなイメージが思い浮かぶが、東京学芸大学における教育支援人材養成課程となると、何らかの専門性が求められる。その際に、「教育支援」という同じ言葉を用いると説明できない壁がある。

子どもに関わる全ての人に求められることとしては、連携の壁を越えていくために、自分の専門性や限界、異なる視点で同じ子どもに関わる他者がいるという前提を事前に関ることや、現場では、自分が何者かを伝え、相手が何者かを知ること、そして対等な立場で互いを活かして、子どもの最善の利益のために機能していくことが挙げられた。この内容が教育支援の専門性となり得るのなら、教育学部ではなく、教育支援学部にして、子どもに関わる全員が習得すべき内容なのではないか、という提案に至る議論が展開された。

最後に全員で話題共有をしている際、「教育支援」、「教育支援人材」、「教育支援人材養成」という枠組みが加瀬先生から提供された。2つ目のグループでの話し合いの後、「すごくいい話し合いができていますが、うまく整理するためには、何か場合分けのようなものが必要なのでは。しかし、その場合分けをどのようにしたらいいか分からない。」とっていたので、この3つの枠組みは2つ目のグループでの議論をうまく整理してくれるものとなった。加瀬先生は2つ目のグループの話聞いていたわけではないが、ワールドカフェという性質上、双方のグループを越えて、今回のテーマが整理することができたのではないかと、思う。

大きな理念として理想を掲げる「教育支援」、子どもの最善の利益を目指して子どもに関わる「教育支援人材」、そして仕事につながる専門性を身に着けるための「教育支援人材養成」。この3つの枠組みで整理されたことは、これまで漠然と「教育支援人材とは何か?」と考えていた頃から、大きな一歩を踏み出したのではと考える。40分という時間が、あっという間に感じられるほどの熱い議論がなされた今回のワークショップは、学びを深める非常に有意義なものとなった。